

---

基礎WGの指示に基づき実施した非臨床試験及び自主的に実施した試験・解析の結果について  
(その3)

2008年6月19日

中外製薬株式会社

F.Hoffmann-La Roche Ltd.

発表の目的

---

オセルタミビル(OP)及び活性代謝物(OC)の中  
枢神経系の安全性を評価するために、現在実施  
している非臨床試験及び分析結果を厚生労働省  
及び基礎的調査検討のためのワーキンググルー  
プ(基礎WG)に提供する

- 基礎WG指示に基づき実施・報告した試験
  - 1-1. 脳内での曝露に関連する能動輸送過程(トランスポーター)に関するin vitro試験
  - 1-2. 脳内のカルボキシエステラーゼ1(hCES1)による未変化体の代謝(エステル加水分解)に関するin vitro試験及び代謝物の脳への透過を検討するための静脈内投与による薬物動態試験(リコンビナントhCES1を用いた試験については今回報告)
  - 1-3. ラットにおける脳、脳脊髄液及び血漿中濃度の測定
  - 2-1. 中枢作用に関連する受容体とのバインディングアッセイ
  - 2-2. 非ウイルスシアリダーゼに対するOP、OCの選択性確認
  - 3. 幼若ラット及び成熟ラットを用いた毒性試験
  - 4. 脳内に投与した際の被験動物の行動への影響等に関する評価(今回報告)
  - 5. 循環器系に対する影響に関するIn vitro試験(活動電位持続及びhERG 電流)

## 本日の報告内容

- 脳内濃度に対する脳灌流の影響
  - 自主報告/新規報告
- 幼若ラット及び成熟ラットを用いた毒性試験
  - 自主報告/2007年12月10日基礎WG会議報告内容の補足
- 脳内のカルボキシエステラーゼ1(hCE1)による未変化体の代謝(エステル加水分解)に関するin vitro試験(リコンビナント)
  - WG指示/2007年10月24日基礎WG会議報告内容の補足
- 非ウイルス・シアリダーゼ(特にニューロン組織由来シアリダーゼ)のOP、OC選択性の確認
  - 自主報告/2007年12月10日基礎WG会議報告内容の補足
- 脳内に投与した際の被験動物の行動への影響等に関する評価
  - WG指示/新規報告
- ◆ 基礎WGに提出した試験報告書のデータレビュー報告
- 中枢神経系に関する非臨床試験及び精神神経系有害事象の臨床的意義に関する総括

## ラットにおけるOP及びOC単回静脈内投与後の 薬物動態: 脳灌流の役割



Roche ロシュ グループ

### 背景及び目的

- げっ歯類の試験において、OP経口及び静脈内投与後の脳組織ホモジネート中には低レベルのOPと、より少量の活性代謝物OCが認められた。
- 薬物濃度の脳/血漿比が比較的小さいため(特にOC)、脳血管中に残存している血液により、脳中OP及びOCの曝露が過大評価されていた可能性がある。
- 本試験でOPおよびOCの薬物動態をラットを用いて評価した。

# 方法

- 30mg/kg\* のOPあるいはOCをラット尾静脈より単回静脈内投与する。
- 試料採取時間に動物を安楽死させ、全ての動物から血漿及び脳脊髄液(CSF)を採取する。
- 半数の動物は脳採取前に残存する血液を除去するため脳灌流を行った。残りの半数の動物は灌流せずに脳を採取した。
- 血漿, CSF及び脳組織中OP及びOC濃度測定はLC-MS/MS法で行った。

\*用量はフリー体換算

7

# 結果

- OP投与試験
  - OPのAUCに関して、脳/血漿比は、脳灌流を実施することによって0.22から0.21に減少した。
  - OCについては、脳中濃度が低すぎるため精度の高いAUCを算出することができなかった。
- OC投与試験
  - OCのAUCに関して、脳/血漿比は、脳灌流を実施することによって約0.02から約0.01に減少した。

8

# 結論

- 脳血管容積から予想されたとおり、特にOCでは脳/血漿比は脳灌流によって減少した。
  - この結果は、これまでに報告した脳中濃度が、実際よりも高く見積もられていることを示している。
- 脳を摘出する前に脳血管中に残存する血液を灌流により除去することは、OCのような脳への透過性が非常に低い化合物の脳内濃度測定には特に重要である。

## (参考) 脳中濃度測定試験の一覧

試験名	脳灌流の有無	報告した基礎WG会議日
幼若ラットおよび成熟ラットを用いた毒性試験(行動、脳内移行性等について検索)	非灌流	2007年12月10日 2008年6月19日(補足)
ラットにおける脳、脳脊髄液及び血漿中濃度の測定、代謝物の脳への透過性を検討するための静脈内投与による薬物動態試験	非灌流	2007年12月10日
脳内濃度に対する脳灌流の影響	灌流・非灌流の比較	2008年6月19日
脳内に投与した際の被験動物の行動への影響等に関する評価	灌流	2008年6月19日
成熟ラットにおけるオセルタミビル経口投与後の脳への曝露と行動評価	灌流	2008年6月19日

## 承認申請時に実施した幼若ラットにおけるOP経口投与毒性試験における曝露データ

### 背景及び目的

- 2つの幼若ラット試験で脳中濃度を評価した。
  - 2007年に実施
    - 7日齢ラットの脳ホモジネート中OP濃度は低かった。
  - 2001年に実施
    - 幼若ラット、特に7日齢ラットの脳ホモジネート中に非常に高濃度のOPが認められた。
- 2001年に実施した試験結果を再評価したところ計算ミスが見出され、幼若ラットの脳中OP及びOC濃度は過大評価されていた。
- 2001年に実施した試験報告書の生データに問題はなく、該当CROは、曝露データ(脳中濃度)を再計算し、報告書の修正を行った。

# 方法

- 2007年に実施した試験結果を基に脳/血漿比を算出した。
  - 2施設で実施した単回経口投与GLP試験(7及び42日齢ラットにOPを394~1314 mg/kg\*経口投与)
- 2001年に実施した試験の生データから正しい方法で算出した値を基に脳/血漿比を再算出した。
  - 上記と異なる2施設で実施した単回経口投与GLP試験(7, 14, 24及び42日齢ラットにOPを500~1000 mg/kg\*経口投与)

\*用量はリン酸塩換算

13

# 結果

- 再計算の結果、OP及びOCの脳/血漿比はいずれも1未満であった。

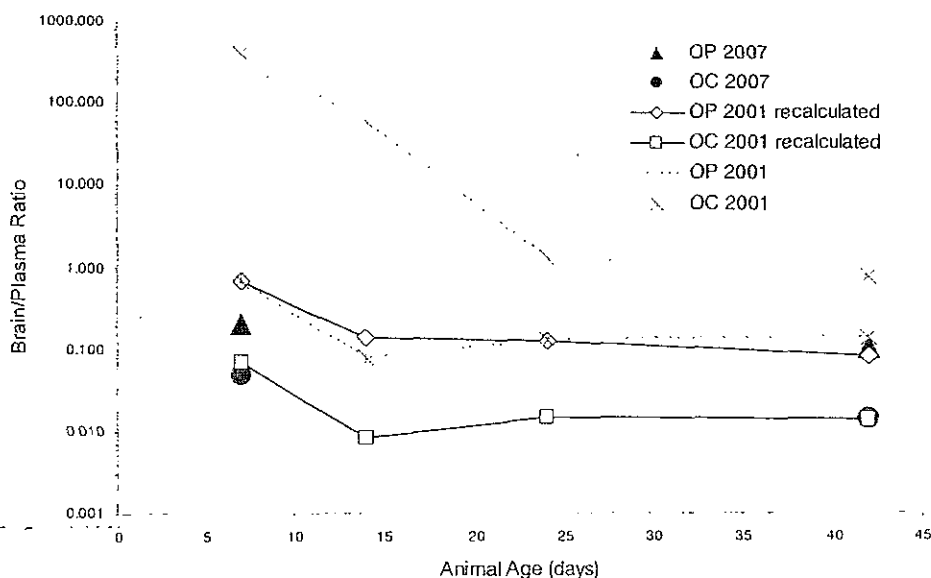


Figure: OP1000 mg/kg 投与後(2007年データは 920 mg/kg投与時のCmaxから外挿)の幼若ラットの各日齢及び成熟ラットにおけるOP及びOCの脳/血漿比 (Cmax)

14

# 結論

- 2001年実施試験の再計算結果と、2007年実施試験の結果はほぼ一致しており、幼若ラットにおけるOP及びOC曝露量の脳/血漿比は低いことが確認された。

WG指示試験名：脳内のカルボキシエステラーゼ1(hCE1)による未変化体の代謝(エステル加水分解)に関する*in vitro*試験(リコンビナント)

---

ヒトリコンビナントカルボキシルエステラーゼ1及びカルボキシルエステラーゼ2発現系を用いた、OPからOCへの変換についての*In vitro*試験



## 背景及び目的



- カルボキシルエステラーゼは末梢及び低レベルながら脳で発現しており、全身及び脳内のOP及びOC濃度に影響を及ぼす可能性がある。
- いくつかのサブタイプが存在し、Shiら(2006)はヒトリコンビナントカルボキシルエステラーゼ 2 (rHCE 2)ではなく rHCE1がOPの変換に関与していることを報告している。
- これらの2つのサブタイプのどちらがOPの変換に関与しているかについて、さらに検討した。

17

## 方法

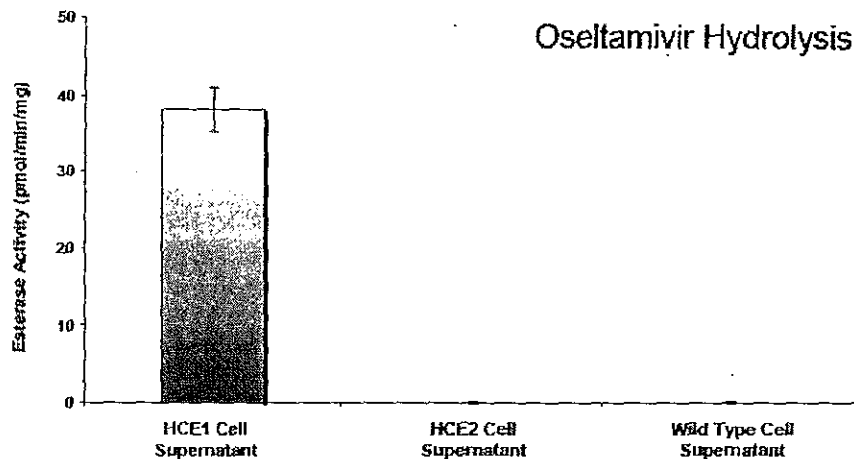


- オセルタミビルエステラーゼ活性は以下の *in vitro* 系を用いて評価した:
  - Sf9 (昆虫細胞)で発現させた組換えHCE1及びHCE2
  - 対照群は野生株バキュロウイルスを感染させたSf9細胞
- HCE1 及び HCE2 エステラーゼ活性は、methyl anthranilate (HCE1選択的)及びprocaine (HCE2選択的)加水分解活性により測定した
- OPの最終濃度は10 $\mu$ M ; 反応時間は 30分

18

# 結果

- HCE1を発現させた細胞の培養上清はオセルタミビルの加水分解活性を示した。
- HCE2を発現させた細胞の培養上清は、野生株を感染させた細胞の培養上清と同様にオセルタミビルの加水分解活性を示さなかった。



- 陽性対照薬物は、それぞれの細胞培養上清画分で、HCE1あるいはHCE2選択性を示すことを確認した。

19

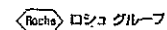
# 結論

- オセルタミビルはヒトカルボキシエステラーゼ2(HCE2)ではなく、ヒトカルボキシエステラーゼ1(HCE1)によって加水分解される。
  - Shi et al (2006) 及び Sugiyama et al (2008) によって公表された結果と同じであった。
  - CNSとの関連性: 脳におけるHCEの発現が少ないことから、脳内局所で代謝レベルはごく僅かと考えられる。この結果は、先に報告した我々の非臨床試験結果\*と一致する。

\*2007年10月24日基礎WGで報告: 脳内のカルボキシルエステラーゼ1(hCES1)による未変化体の代謝に関するin vitro試験(脳組織)

## OP及びOCのウイルス及び ヒトノイラミニダーゼ1-4(Neu 1-4)に 対するin vitro選択性の比較

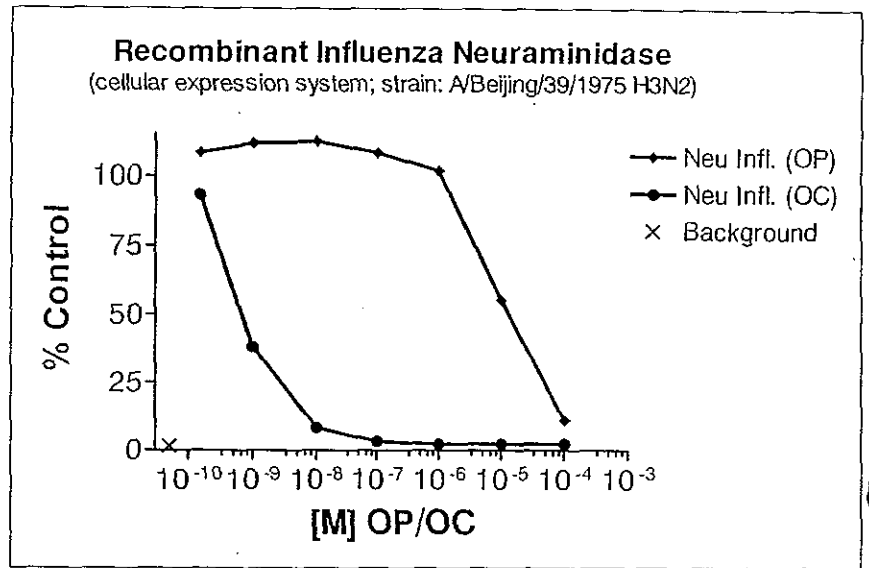
### 方法



- 薬物: OP/OC
- cDNAs: 配列確認済の市販標品又は自社合成品
- リコンビナントノイラミニダーゼ発現系
  - ✓ ウイルスノイラミニダーゼ; 細胞発現系
  - ✓ ヒト Neu1 & 2; 細胞発現系
  - ✓ ヒト Neu3 & 4; in vitro 転写系
  - ✓ Neu1の転写発現対照としてGPCR(V1b受容体)遺伝子を導入した細胞を用いた
- アッセイ方法: グリコシド基質(4-MU-NANA)を用いた蛍光測定法(Potier et al. (1979)の方法の変法)。

# 結果 - ウイルスノイラミニダーゼ

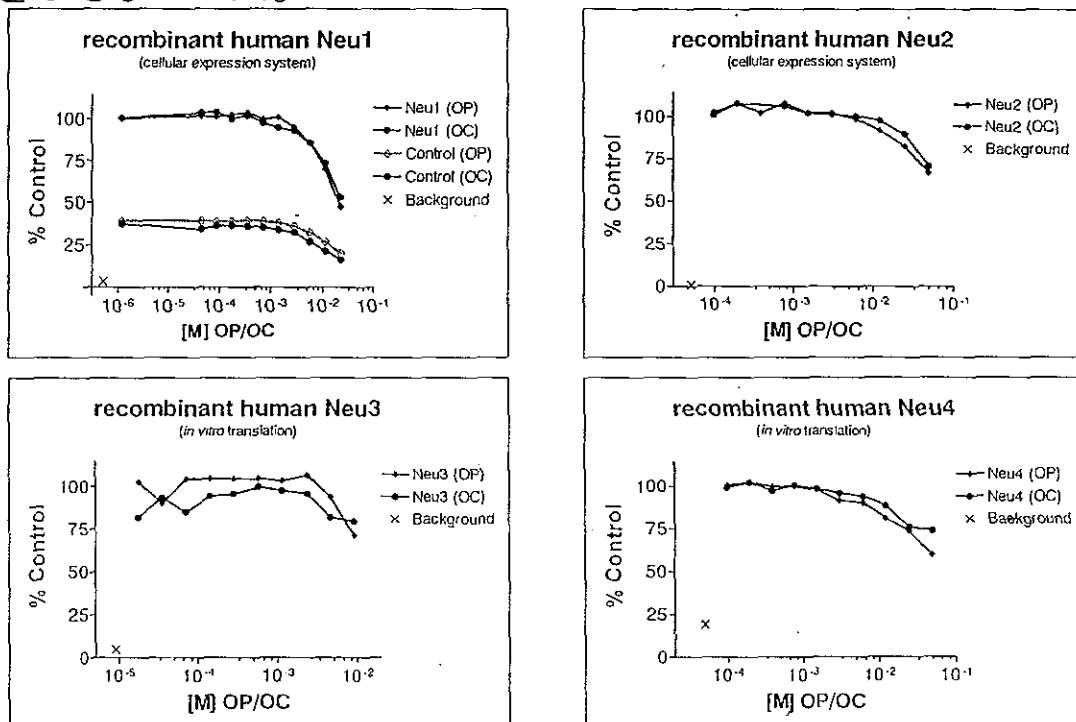
- ウイルスリコンビナントノイラミニダーゼに対するOP及びOCの効果は以下の通り  
**OC: IC<sub>50</sub> ~ 0.3 nM**  
**OP: IC<sub>50</sub> ~ 10 μM**



- このデータは、すでに確認されたインフルエンザウイルスのノイラミニダーゼ活性に対する作用とよく一致する (e.g. Mendel et al. 1998)

# 結果 - ヒトノイラミニダーゼ

- OP及びOCはヒトリコンビナント Neu1-4に対し、1 mMまで阻害活性を示さなかった。



## 結果 一 臨床濃度との乖離

臨床用量投与時のOP及びOCの血漿中及び外挿したヒト脳内濃度と、いずれのヒトノイラミナーゼに対しても阻害活性を示さなかった濃度(1mM)との間には大きな乖離がみられた

	Plasma		Brain	
	Cmax	Margins	Cmax <sup>2</sup>	Margins
OP	~190 nM (~58 ng/ml)	~5,000-fold	~6.7 nM (~2.1 ng/g)	~150,000-fold
OC	~1,300 nM (~370 ng/ml)	~800-fold	~77 nM (~22 ng/g)	~13,000-fold

1: 75 mg bid投与時の定常状態における血漿中濃度

2: 上記1および脳脊髄液中濃度より外挿した値

25

## 結論

- OP 及びOC は、非常に高い濃度においてもヒトノイラミナーゼ Neu1-4のいずれに対しても阻害活性を示さなかった。


—この結果は、我々が先に報告した非臨床試験結果\*と一致する。

- 臨床濃度と大きな乖離(800 – 150,000倍)が認められた。

\*2007年12月10日基礎WGで報告: 非ウイルス・シアリダーゼ(特にニューロン組織由来シアリダーゼ)のOP,OC選択性の確認

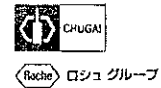
## 成熟ラットにおけるオセルタミビル脳室内及び経口投与後の行動評価とCNS曝露量

### 背景及び目的

 ロシュ グループ

- 厚生労働省/基礎ワーキンググループの指示の下に脳室内投与を行い、OP及びOCの脳への高濃度曝露条件下で行動評価を行うことを目標とする。
- OP及びOC脳室内投与後の曝露の均一性について、OP経口投与と比較検討した。
  - 脳室内投与の忍容性についてもあわせて検討した。

## 方法 - 脳室内投与予備試験



- 雄性ラットへの投与量(フリー体換算)
  - 脳室内投与: OP, OCともに0.2, 2  $\mu\text{g}/\text{animal}$
  - 経口投与: OP 200 mg/kg
- 観察項目
  - 投与後の適切な時間に薬物に起因した行動変化及び顕著な毒性徴候観察、および瀕死状態あるいは死亡について、1日に2回確認。
- 測定試料採取
  - 血漿, 脳脊髄液(CSF), 嗅索を含む嗅球(脳前方部), 海馬(脳中間部)及び小脳(脳後方部)を採取。脳組織は、灌流後に採取。

29

## 結果 - 脳室内投与予備試験



### 行動及びTK

- OPおよびOCの脳室内投与において、行動への影響は認められなかった。
- 脳室内投与後の脳曝露:
  - OP投与後のOP脳中濃度は、脳部位によって~30倍の差がみられたが、OC濃度は比較的その差が小さかった(10倍以下)。
  - OC投与後の脳中濃度は、脳部位によって~6倍の差がみられた。
- 経口投与後の脳曝露:
  - OP投与後のOP脳中濃度は、脳部位によって~5倍の差がみられたが、OC濃度はその差が2倍以下であった。

30

# 結果 - 脳室内投与予備試験

## TKモニタリング - 最高濃度



Roche ロシュグループ

Route	Compound: Dose	Analyte	Mean Cmax (ng/mL or ng/g)				
			Plasma	CSF	Cerebellum	Hippocampus	Olfactory bulb
ICV	OP: 0.2 µg/rat	OP	0.06**	17.2	40.1	245	7.94
		OC	NG***	4.66	10.2	2.54	0.949
ICV	OC: 0.2 µg/rat	OC	0.826	68.1	32.3	18.2	8.65
ICV	OP: 2 µg/rat	OP	0.658	70.8	299	947	49.6
		OC	0.436	5.23	3.24	13.6	9.60
ICV	OC: 2 µg/rat	OC	4.71	446	308	764	148
Oral	OP: 200 mg/kg	OP	7620	534	489	926	194
		OC	14600	569	177	128	232
Oral*	OP: 1000 mg/kg	OP	16300	1120		2310	
		OC	49700	363		641	

### Limit of quantification

Plasma: 0.1 ng/mL, CSF: ~0.1 ng/mL Brain: 0.5 ng/g

### Extrapolated human brain level

OP: 2.1 ng/g, OC: 22.0 ng/g

\* Study No. 8036P08のデータ, \*\*濃度が0.1ng/mLを超えたのは1例のみ, \*\*\* NC: 計算せず

31

# 要約 - 脳室内投与予備試験



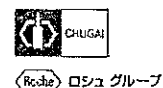
Roche ロシュグループ

- OPおよびOCの脳室内投与:
  - OCの場合、脳室内投与後に経口投与と同程度に均一な脳曝露が得られる可能性が示されたが、OPの場合は経口投与に比べて脳曝露の均一性は低かった。
  - 十分コントロールされた試験にもかかわらず、動物個体間差が著しく大きかった。
  - 投与部位に近い海馬では比較的高いOPおよびOC濃度が検出された。
    - OPの場合、ヒト脳中濃度(外挿値)の450倍
    - OCの場合、ヒト脳中濃度(外挿値)の35倍
  - 行動に対する影響はみられなかった。
- OP経口投与:
  - 脳中OP及びOCの曝露は比較的高く均一であった。

32



## 中間結論と次のステップ 脳室内投与予備試験



- 脳室内投与予備試験の結果、脳室内投与により脳でのOPの均一な曝露が得られる可能性は低いことが判明した。
- ラットにおける中枢神経系の安全性薬理試験を、経口投与で実施した。その理由は以下の通り
  - 非常に高い用量のOPを経口投与した場合、OP及びOCの十分な安全域が確認できる比較的均一な脳曝露が得られる。
  - 臨床での投与経路と同じである(cf. ICH S7a guidelines)。

33

## 方法 – 成熟ラットにおけるOP経口投与後の脳への曝露と行動評価



- 行動
  - 雄性ラットにOP(500, 763及び1000 mg/kg\*)を経口投与
  - 投与前, 投与1, 2, 4, 6及び8時間後に直腸温測定を含むIrwin変法を実施(体温測定を含む40以上の観察項目)
  - ブラインド下で行動観察
  - 試験系の確認のため、陽性対照としてD-amphetamin 10 mg/kg\*投与群を設置
- 脳への曝露
  - 雄性SDラットにOP(763及び1000 mg/kg\*)を経口投与
  - 血漿、脳脊髄液、及び灌流した脳を採取し測定

\*用量はフリー体換算

34

## 結果 – 成熟ラットにおけるOP経口投与後の脳への曝露と行動評価



- 行動
  - 行動, 運動量, 協調性及び感覚/運動反射反応に対する影響は認められなかった。
  - 用量相関性のない一過性の軽度の体温低下(投与1時間後のみ、最大0.5°C)が認められた。
  - D-amphetamineは予想されるような明らかな中枢刺激作用を示した。
- 脳への曝露
  - OP経口投与(763及び1,000 mg/kg)後の脳中OP及びOC濃度最大値は、それぞれ約2,300および640 ng/gであった。
  - OPおよびOCの脳/血漿比(AUC)は、それぞれ0.12及び0.01であった。

35

## 要約 – 成熟ラットにおけるOP経口投与後の脳への曝露と行動評価



- 行動
  - OPは中枢神経系機能に影響を及ぼさず、ごく僅かな体温変化(最大0.5 °Cの低下)がみられたのみであった。
  - OPの無毒性量(NOEL)は1,000 mg/kg以上であると考えられた。
- 脳への曝露
  - OP 1,000mg/kg経口投与後の脳および脳脊髄液中最高濃度は比較的高く、これらの成績は、過去の試験成績と同様であった。

36

## 総括

- OPの場合、脳室内投与後に均一な脳曝露が得られる可能性は低いことが判明した。
- 投与部位に最も近い部分では局所的に比較的高い濃度のOP及びOCが検出された(海馬では、OP及びOCそれぞれヒト脳中濃度(外挿値)の450倍および35倍)。
  - OP及びOC脳室内投与後に、行動に対する影響はみられなかった。
- 非常に高い用量のOP経口投与により、比較的高く均一なOP及びOCの脳曝露が達成された。
  - 40以上の観察項目で行ったIrwin変法試験の結果、中枢神経系への影響が無いことを確認した。

37

## 基礎WGに提出した試験報告書の データレビュー報告

- 目的
  - タミフル非臨床試験についての信頼性を確保するため、厚生労働省の指示に基づき、生データと報告された結果が一致しているかどうかを確認した。
- 結果
  - 基礎WGに提出した試験についてロシュ及び中外の非臨床専門家によるレビューの結果、問題となる点は見出されなかった。
- 結論
  - 生データと報告結果を照合した結果、試験の信頼性が確保されたと考える。

38

## 中枢神経系に関する非臨床試験および精神神経系有害事象の臨床的意義に関する総括

39

### 中枢移行性は低い



- ロシュ非臨床試験(経口投与)
  - フェレット及びラットのオートラジオグラフィ試験における脳での低曝露
    - 脳/血漿中濃度 (B/P)比 < 0.3
  - ラットTK試験における血漿中濃度に対する(灌流)脳濃度比: OPが約0.12, OCが約0.01
  - 幼若ラットにおけるB/P比は, 概ねOPが< 0.5, OCが< 0.08
- 公表文献
  - マウス持続静脈内投与試験: 定常状態の B/P比はOPが<0.1, OCが<0.01
    - 幼若マウス: 定常状態の B/P比はOPが約0.25 (Ose et al. 2007)
  - マウス経口投与試験: B/P比はOPが<0.2, OCが<0.02 (Morimoto et al. 2008)
- 臨床情報
  - 日本人/白人健康成人ボランティアにおける脳脊髄液濃度測定試験
  - 2報の小児インフルエンザ患者における報告

#### 結論:

非臨床試験のデータおよび臨床情報からは、OPおよびOCの中枢への移行性は低いことが示された。

40

## 中枢移行性が低いことを説明する機序

### ロシュの非臨床試験

- OP: 脳血管関門(BBB)の透過性は比較的良好であるが、BBBのP-gp(トランスポーター)により能動的に排出(active efflux)される。
- OC: 物理化学的性質 (i.e. logD, polar surface area) により、OCのBBB透過性は低くなる。
  - 局所における OPからOCへの変換はラット及びヒト脳組織中では非常に低い。

### 公表文献

- OP: BBBで P-gp による能動的排出により制御されているため脳曝露は少ない ; P-gp knock-outマウスのOPのB/P 比は wild-typeマウスに比べて5-6倍増加した (Morimoto et al. 2008)。
- OC: *in vitro*試験では OAT1, OAT3が脳からのOCの排出に関与している可能性が示唆されている (Ito et al. Abstract 2007)。しかし *in vivo*ではそのような能動的トランスポーターは報告されていない。

41

## 透過機序についての考察

病的あるいは遺伝的変動状態での低い脳透過性を確認

### OPIに関して

- P-gpはOPの排出に重要であるが、P-gpがない場合においても、B/P比はおおよそ0.35 – 0.85と推察される(P-gp knock-outマウスのデータ、Ose et al. 2007, Morimoto et al. 2008)
- そのような場合においても、OPの血漿中濃度は低いことから、脳での最大曝露はわずかであると予想される。
  - ヒトで報告されているP-gp変異が機能に影響するかどうかは不明である。
  - 併用される薬物との相互作用に関して精神神経系の有害事象をレビューした結果からは、P-gp阻害の徴候は認められていない。

### OCに関して

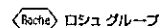
- BBB障害時(炎症過程など)の脳OC濃度は300 ng/g以下と推定される。
- ラットにおいては脳濃度が高い場合においても(OCで641 ng/g)、Irwin変法による行動の検討では中枢神経系に対する影響を認めなかった。
- BBB障害時の過大解釈について
  - 完全なBBB障害は、それ自体で致死となると考えられる。
  - 小児脳症患者では、CSF中にOCが検出されなかったことが報告されている (Straumanis et al. 2002)。

42

# OP及びOCは *in vitro* で中枢作用を示さない

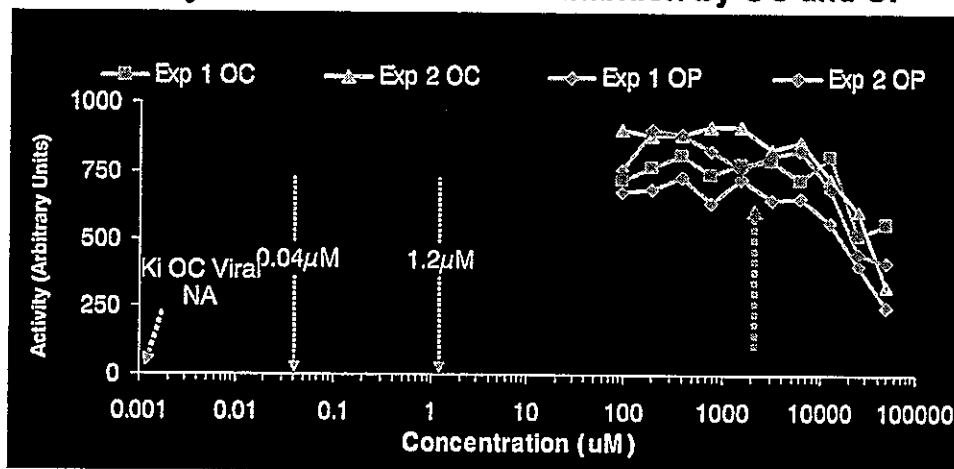


ノイラミニダーゼの選択性に関するロシュの試験



- OP及びOCともに1 mMまで活性は認められなかった:
  - PC12細胞(神経系のモデルシステムとして使用されるラット神経内分泌腫瘍細胞株)
  - ラット及びサルの脳由来NA活性
  - リコンビナントヒトノイラミニダーゼ(Neu1-4 =存在する全てのアイソフォーム)

Monkey brain neuraminidase: inhibition by OC and OP

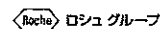


43

# OP及びOCは *in vitro* で中枢作用を示さない



他の標的に対する影響



## ロシュ非臨床試験

- 重要な標的を含む157アッセイにおいて、OP及びOCは 30  $\mu$ M まで活性を示さなかった。
  - 受容体
    - glutamate, dopamine, serotonin, epinephrineなどの神経伝達物質
    - Chemokine, hormone及びneuropeptide
  - イオンチャネル
    - Ca<sup>2+</sup>, Na<sup>+</sup>, K<sup>+</sup>, hERG channels
  - 酵素
    - Proteases, kinases, phosphatases, NO synthases, MAO-A & B, Na<sup>+</sup>/K<sup>+</sup>-ATPase
  - 114 標識リガンド結合アッセイ
  - 43 機能アッセイ

## 公表文献

- dopamine, norepinephrine及びserotonin系に対し影響がないことにより(Satoh et al. 2007)、更に支持される。

44

# in vivo非臨床試験で中枢に対する影響はない ロシユ試験

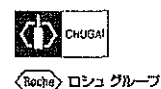


- オセルタミビルは非常に高い用量の経口投与(300 ~ 1000 mg/kg)\* においても動物種、齢にかかわらず、中枢作用を誘発しなかった。
  - OPは、
    - げっ歯類およびサル急性および慢性毒性試験において、活動性の亢進あるいは他の異常行動を誘発しなかった。
    - ラット及びマウスのIrwin変法試験において、意味のある異常行動を誘発しなかった。
    - 1歳以下の幼児への投与を支持するために実施した7日齢幼若ラット試験のFOB試験では、300 mg/kgでCNSに対する影響は認められなかった。
    - マウスでのhexobarbital-誘発睡眠に対する影響はなかった。
    - マウスの痙攣モデルにおいて興奮性の作用を認めなかった。
    - 脳、脊髄、坐骨神経に病理組織学的変化はみられなかった。
- これらの結果は、日本人の健康成人男子ボランティアで行われた臨床試験においてOPが睡眠パラメータに何ら影響しなかったことと一致している。

\*フリー体換算、臨床用量(1~2 mg/kg bid)の約150 ~1,000 倍高い用量

45

## 要約:精神神経系有害事象についての 薬理学的機構による説明



- CNSへの移行
  - 非臨床及び臨床試験において、OP及びOCの中枢移行性は低かった。
- 薬力学
  - In vitro試験においてタミフルが中枢神経系副作用を現す機序は認められていない。
  - 非常に高い用量においてもげっ歯類及びサルで異常行動は認められていない。
  - 日本人健康成人ボランティアにおける睡眠検査室試験においてオセルタミビルの影響は認められていない。
- 薬理遺伝学と薬物・薬物相互作用
  - 薬理遺伝学的機序は確認されていない。

46

# 結論

- OP及びOCは、
  - 中枢移行性が低い。
  - 以下のことが認められていない。
    - 非臨床および臨床試験で中枢作用
    - 中枢作用を誘発する作用機序
    - 薬理遺伝学的機序

以上のように、タミフルが精神神経系有害事象の原因となるようなエビデンスは得られなかった。